



TITLE:

天保期国訴の組織過程 一大和川
筋剣先船国訴をめぐって一

AUTHOR(S):

谷山, 正道

CITATION:

谷山, 正道. 天保期国訴の組織過程 一大和川筋剣先船国訴をめぐって
一. 人文學報 1994, 73: 1-29

ISSUE DATE:

1994-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/48410>

RIGHT:

天保期国訴の組織過程

——大和川筋剣先船国訴をめぐる——

谷 山 正 道

はじめに

I 剣先船国訴の原因と経過の概要

II 剣先船国訴の組織過程

おわりに

は じ め に

国訴の組織結成をめぐる問題、すなわち、非領国地域であった大坂周辺地域で近世後期に1000か村を越えるような統一戦線がいかにして結成されたのかという問題は、そのオルガナイザー・指導層をめぐる問題とも関って、国訴をめぐる主要な論争点の一つになってきた¹⁾。この問題に関して、1960年代までの国訴研究の第一の高揚期には、以下のような代表的見解が提示されていた。

(a 1) 古島敏雄・永原慶二氏

天領・私領にわたって、この地方特有の入組支配の錯雑をこえて1007ヵ村の村々の生産者が結集してゆく過程は少なからず困難なものであったに相違ない。孤立分散的な農民たちがかかる広汎な結集を実現するには、農民のみの力では不可能であり、村々に発生してきた在郷綿商人がその結集のオルガナイザーの役割を果たしたと思われる²⁾。

(a 2) 八木哲浩氏

(文政6年摂河綿国訴の)主体勢力はもちろん綿作地帯の農民であったが、その組織者となったのは大坂市中ないし近接農村の綿屋仲間たちであり、その代表的商人たる天王寺・今宮・勝間の三ヵ村の綿商人たちであったと思われる³⁾。

在郷商人は一般に国訴闘争において農民と行動を共にし、ときにその指導者となったことは疑いないであろう⁴⁾。

(b 1) 津田秀夫氏

封建社会のもとでは、農民自身が商品生産者化する過程で、本来的にあって、なお孤立分

散化させられており、このために、農民みずからを結集するにあたっては、従来からの行政組織が大きな役割を果たすことになったのである。ただ、この段階での村落の行政組織の代表者は村内での直接生産者、一般農民の村内の民主化闘争を受けていることの意味が重要となってくるのである⁵⁾。

(b 2) 小林茂氏

国訴の組織力は実に驚くべきで、短時日に結成され、訴訟にもちこまれている。地縁的な連絡はもとより、領主間の連絡も緊密であった。土地に緊縛された農民が、摂河、場合によっては和泉にまで、呼びかけるほどの戦術を学んだものは何であったか、それは他ならぬ領主支配にあったものとする。近世農村が入会山関係とか灌漑用水関係で、村々が結ばれていたことはいうまでもないが、貢租徴収のためや領主命令伝達のために、組合村々を結成したこと、近世中期以後強化される国役・夫役などによって、村々の結合の機会を多くしたこと、領内組織を強固にするために例えば郡中惣代などを設置し、郡内問題にあたらせたことなどが、村々郡々の連絡を密にしたものであろう。しかも、この上に商品経済の発展が、村々連合を推進させたものであった⁶⁾。

(a) 系列は国訴の組織結成における在郷商人のオルガナイザーとしての役割を評価しようとする見解、(b) 系列は津田氏の表現のほうを借りて言えば「村落の行政組織」利用説とも称すべき見解であるが、当時においては、国訴＝小ブルジョア的闘争という理解もあって、農民的商品流通の担い手としての在郷商人の役割に光をあてようとした(a)系列の見解のほうがどちらかと言えば優勢であった。しかし、(a 1)の引用部分の前後に「三所問屋に対する棉作農民の反撃がどのように組織されていったかは全く判らない」「この訴訟事件の内容について、訴訟文がどのようにしてまとめられたのであるか、運動がどのように展開されたのか、また1007ヵ村とはどの村々であったか、といった重要な問題は、残念ながら資料の不足のため解決することができず」云々と記され、また(a 2)の引用部分のあとにも「それぞれの国訴について具体的にこれを明らかにしえないので推論にとどめるわけであるが」云々と断り書きされていることから判明するように、実証抜きの思いつきの域を出るものではなく、(b)系列の研究をも含めて、この時期の研究においては、国訴の組織構造に関する実証はまだ不十分であったと言わざるを得ない。

1980年代に入って、国訴研究は第2の高揚期を迎え、そのなかで、国訴の組織構造や運動構造に関しても、研究が大きく前進するようになった。そのトレーガーとしての役割を担ったのは藪田貫氏であり、氏は、(a)系列の説を「思い込み以外の何物でもない」と鋭く批判し、(b)系列の説を継承する立場に立つことを表明した上で、摂河泉の数多くの国訴の事例をとりあげて、その組織構造と運動構造について本格的な分析を行われた。前者に関する氏の分析結果は、つぎのように集約される⁷⁾。

国訴の組織原理には、領主制原理と地域性原理とがあり、前者の場合には行政組織が利用され各所領ごとに惣代が出される形をとり、後者の場合には地域ごとのまとまりを基礎に郡ごとに惣代が出される形をとる。摂河の場合には、後者に基づく組織結成が本来的なあり方であったと考えられるが、（おそらく）文政6年の国訴を画期に前者に基づく形（幕領の組合村体制を主軸とする）へと転換していった。一方、和泉の場合には、一貫して前者に基づいて組織結成が行われていた。

国訴の組織原理としての地域性原理の発見——これが、国訴惣代制における「頼み証文」を媒介とする委任関係の発見とともに、国訴の組織・運動構造面に関する氏の研究のユニークな点であり、注目すべき点である。ただし、摂河の場合、郡規模の訴願の際にはともかくも、まさに国訴と呼びうるスケールで訴願が行われ、はじめて国訴という呼称が使用されるようになった文政6年のそれ以降には、前者＝領主制原理を主軸に組織結成が行われるようになっており⁸⁾、和泉では一貫して前者に基づいて、また筆者が検討した大和の場合にも前者を主軸に組織結成が行われていることからすれば、前者を主軸とするタイプこそが国訴と呼びうるスケールの訴願の際の本来的な組織結成のあり方と考えるべきではなかろうか。

最初に国訴の組織結成に関する研究史にふれながら私見を述べたが、以下本稿では、天保12年の大和川剣先船をめぐる国訴をとりあげ、前述の研究動向を念頭におきながら、主にその組織過程について論じることにした（本国訴についての先行研究は乏しいが⁹⁾、幸いなことに、国訴の準備集会に参加した所領惣代が詳細な記録を残しており¹⁰⁾、それを通して本国訴の準備過程・組織過程を具体的にあとづけることができる）。また、これと関連して、本国訴に関して注目されるいくつかの問題についても、論及することにした。

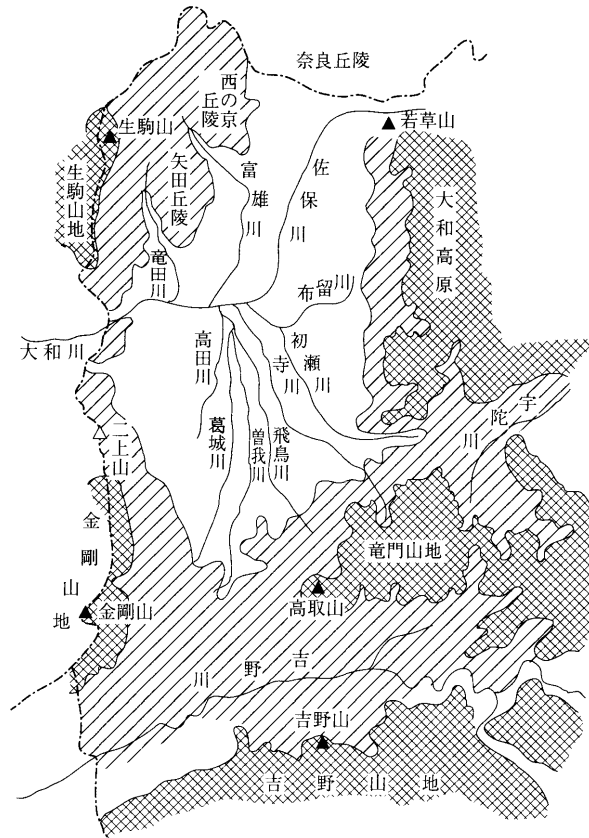
I 剣先船国訴の原因と経過の概要

貝原益軒は、その著『南遊紀行』のなかで、大和川についてつぎのように記している¹¹⁾。

大和川は大和の長谷より出づ、国^{くになか}中の数郡の小川皆川に入、竜田川も一になり、竜田の南、両山の間を流れ、国^(分)府へ出、国分の下にて石河川と一に合せり、大和国中の川、吉野川のみ別に流れて南へゆく、其外の小川は皆大和川に流入て大坂にいづ、是をしらざる人は、大和の川は皆紀州へ流出るとおもへり、国府の一里上迄川舟上る、大坂より炭・薪・塩・米・干魚・油糟等、色々の物を船につみて、大和へ上せてうる、又ほしかとて、干^{いわし}鱈を多くつみ上す、是和州土民の田圃の肥に用る物也

初瀬川を源流として佐保川と合流し、寺川・飛鳥川・曾我川・葛城川・高田川・富雄川・竜

図1 奈良盆地地形略図

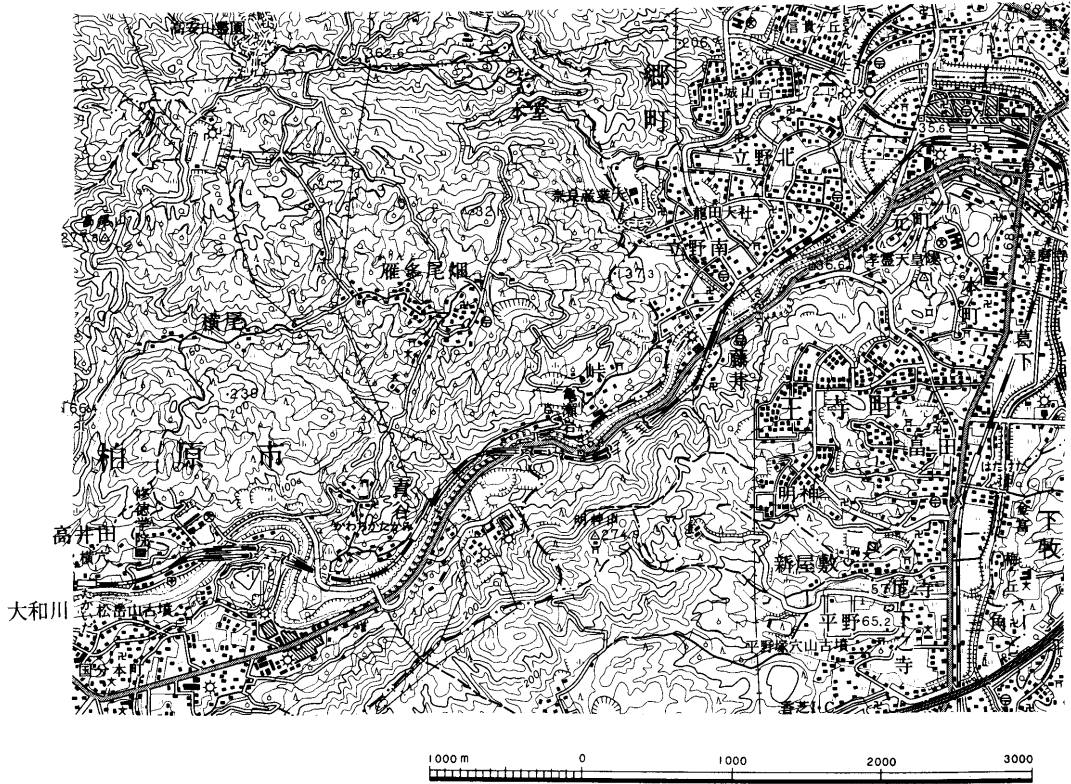


(奈良県歴史教育者協議会『奈良盆地』2頁所掲)

田川などの小河川の水を集めながら奈良盆地を西流し、亀瀬の峡谷を経て河内平野へと流れ出る大和川（図1参照）の水運は、江戸時代にあっては、大坂と大和とを結ぶ物資輸送の大動脈として、大きな役割を果たしていた。すなわち、宝永5年の一史料¹²⁾に、「和州田畑之肥し仕候油粕・干鰯其外諸色之荷物大坂に而買調運送之儀、大和・河内之国境亀瀬と申所迄剣先船に積登せ、亀瀬の上は立野村魚梁船に而勝手——之川筋江積登申候御事」と記されているように、「大和・河内之国境」付近に位置し、峡谷をなし河上に岩盤が露出していた亀瀬を境に、大坂側には剣先船¹³⁾、大和側には魚梁船¹⁴⁾が就航し、物資の輸送に携っていた。

亀瀬と大坂とを結ぶ剣先船の運航が大坂町奉行所によって公認されたのは正保3年のことで、利用の増加に伴って、延宝3年には、当初認められていた211艘（古剣先船）に加えて、さらに100艘（新剣先船）の運航が認められるようになった。一方、大和側では、初期の船数は不明であるが、江戸中後期には約70艘の魚梁船が就航し、盆地中央部まで往来していた¹⁵⁾。双方の船の活動範囲は、亀瀬を境にしてその下流と上流とにはっきりと区分されていたのである¹⁶⁾。

図2 亀瀬周辺地図



(国土地理院作製「大阪東南部」5万分の1)

大和川の下り荷物は、「綿・雑穀」をはじめ「吉野紙・葛、宇陀薬種之類・多葉粉、三輪素麺」といった大和の「所々産物之品」であり、一方、上り荷物は、「肥し油粕・干粕・干鰯、其外諸色并塩之類」で¹⁷⁾、その中心は肥荷物であった（前掲史料の記載も参照のこと）。天保12年8月13日付の本国訴の訴状¹⁸⁾によれば、「当時ハ拾万駄内」であるが最盛期には年間40万駄ほどの肥荷物が大阪から剣先船で積み上せられていたという。

したがって、剣先船の船賃の問題は、年々莫大な金肥を購入して綿作をはじめ商業的な農業を展開していた大和の農民たちにとっては、重大な関心事であり（船賃が値上りすればその分購入肥料が実質的に上がることになるわけだから）、大和の農民たちは、剣先船仲間による船賃の引上げに際して、すでに宝永2年・正徳4年・享保11年・天明3年と、4度にわたって反対訴願を展開し、これに歯止めをかけてきた（具体的経過についてはここでは省略する）¹⁹⁾。

ところで、本稿で分析対象とする天保12年の剣先船国訴は、そうした運賃値上げ問題に端を発したものではなかった。その原因について、津藩領の大庄屋西田伝三郎・高瀬文作の両名は、

以下のように記している²⁰⁾。

大和国中方田畑肥之儀、先年大坂表河筋大和川剣先船_ニ而積登セ、尤右船賃之儀_ニ付毎度出入_ニも相成候処、当盆前大坂表舟持共大和肥屋共江申参り候_ニハ、亀瀬之浜辺川床荒候而舟損し強ク、先年ハ拾三年斗も通致候所、近年_ニ而ハ拾ヶ年ならてハたもち不申、依之揚場四町程下_ニ致し呉候様申之_ニ付、相答候_ニハ、右四町程之運賃其方_ニ相賄候哉と相尋候得者、一駄_ニ付六分懸_ニ相掛り候儀_ニ付賄出来かたく被申_ニ付、左候而ハ肥荷物凡年_ニ六万駄_ニノ三拾六貫匁斗者国難_ニ相成候付迎も難申談、右通船_ニ付候而者是迄毎々出入_ニも相成候儀_ニ付彼是不申是迄通_ニ運送致し候様申候得者、無是非儀と承知之儀_ニ候処、盆後_ニ至り一艘積拾六駄之内六駄河筋国分浜_ニ而はね荷致し、軽メ十駄積_ニ而登り候故自然と差支_ニ相成候付、取斗之儀御料私領惣代_ニ而御談被下度旨、最寄肥屋共申出居候

「天保11年の盆前に、剣先船の舟持共から大和の肥屋共へ、亀瀬付近の『浜辺川床荒』による運航困難を理由に、4町程下流への荷揚地の変更²¹⁾を要求してきたが、大和の肥屋共は、その4町程の陸路運送分の運賃を剣先船の舟持共の側で負担しないとすると、年間に剣先船で積み上げられてくる肥荷物およそ6万駄分の運賃36貫匁程が大和側の負担増となり『国難』になるとして、この要求を拒否した。これに対して、剣先船の舟持共は、盆後になって、1艘16駄の積み荷のうち6駄を国分浜で刎荷し、国分～亀瀬間は10駄積で積み上るという手段に出たため、（もはや独自の交渉では埒が明かないと判断した）大和の肥屋共は、『御料私領惣代』に問題の解決方を願い出た」——というのが、ここに記された経緯である。

この肥屋仲間からの依頼を受けて、詳しくは後述するが、表1に示したように、天保11年10月晦日～11月朔日を初回として、大和の「御料私領惣代」らが集まって、本件について何度も対策会議が開かれ、出訴の体制が固められる一方、大坂の剣先船仲間惣代との間で2度にわたって和談の交渉がもたれた。しかし、決裂に終わったため、ついに出訴となり、12年8月18日に、大和の「国惣代」5名が、奈良奉行所の添簡を携えて²²⁾、大坂東町奉行所へ訴願に及んだ。この後、同奉行所で吟味が行われ、11月3日からは天明度の国訴の例にならって西町奉行所の担当となった後、剣先船仲間との間で再度交渉の場ももたれて、ようやくにして和解が成立し、12月14日に、つぎのような「願下御断」書が奉行所へ提出されるに至った²³⁾。

乍恐願下御断^(ケ)

一和州百姓惣代共御当地剣先船筆頭大和屋儀兵衛其外拾貳人相手取、大和川剣先船荷物積入方差支并河岸場替不法申掛、先前御裁許_ニ相振レ候_ニ付、当八月十八日奉御訴証候出入段々御聞札之上左_ニ

天保期国訴の組織過程（谷山）

表1 剣先船国訴の終結に至るまでの経過

年	月/日	経 過
天保11年	10/22	大和肥屋仲間から剣先船一件について相談をうけた高取藩預所の年預ら、国内の主だった所領の大庄屋らへ廻状をまわす。
	10/30～11/1	○第1回集会（於 八木 木原屋嘉右衛門方）
	11/10～12	○第2回集会（於 八木 木原屋）
天保12年	1/18～19	○第3回集会（於 八木 木原屋）
	1/28～29	○第4回集会（於 八木 木原屋）
	2/15～23	出坂。天満の剣先船船会所に赴き、和談の交渉を行う（不調に終る）。
	3/15～18	○第5回集会（於 八木 木原屋）
	4/2～9	出坂。天満の剣先船船会所に赴き、再度和談の交渉を行う（不調に終る）。大坂肥屋積方年行事（仲介者）、後日大和へ出向いてもう一度相談に及びたいと申し入れる。
	4/18～19	○第6回集会（於 八木 木原屋）大坂肥屋積方年行司姿を見せず。「弥公訴之治定ニ相極り候」。
	4/23より	出坂（「相手取候者共町役人江申届ケニ」）
	5/2～3	○第7回集会（於 田原本 鍵屋五兵衛方）
	5/10～11	○第8回集会「拾五人惣代」（うち出訴惣代5人）・会計担当者7人を決定し、出訴費用などの負担方法についても申し合せる。
	5/16～18	○第9回集会（於 八木 木原屋）
	6/8～9	○第10回集会（於 八木 木原屋）
	6/16	「大和国惣代」から剣先船会所へ出訴にふみきる旨を通告し、相手名前の確認を行う。
	6/21	○第11回集会（於 新賀村佐右衛門方）
	6/25～26	出訴費用の負担方法について魚梁間屋と交渉する。
	7/18	○第12回集会（於 田原本 土橋）奈良奉行所への添簡願および大坂町奉行所への出訴の日程を決める。
	8/5	奈良奉行所へ添簡願を行う（8/8 添簡下る）。
	8/10	惣代5人出坂する（夕着）。
	8/18	大坂東町奉行所へ出訴に及ぶ（訴状は8月13日付）。
	8/27	○第13回集会（於 八木 木原屋）
	12/14	天明度の国訴の例にならって、11月3日から西町奉行所の担当となった後、剣先船仲間と再交渉を行って和談が成立したため、同奉行所へ「願下御断」書を提出する。
	12/17	出訴惣代ら、大坂西町奉行所からの「御返翰」を携えて、奈良奉行所へ帰国のあいさつに赴く。
	12/18	出訴惣代ら、奈良奉行所へ文書で本件の結果を報告する。

（備考） 註10)の諸史料をもとに作成。

（替脱） 一川岸場之義已来申掛ケ間敷事

一亀瀬藤井迄荷物壱艘ニ在来之通拾六駄積ニ而和弱荷物差支無之様運送可致事

右者先前御裁許之御趣意を以て厚御利解被成下候付、双方納得仕難有奉存候、尤願面之内順番積并休船之義ハ不行届ニ付御下ケ奉願上候、右御聞届ケ被為成下候ハ、御慈悲と難有奉存候、以上

天保十二_丑年十二月十四日

石原清左衛門殿御代官所
和州平群郡額田部村
庄屋 嘉兵衛印
植村出羽守殿御預り
同劔十市郡新賀村
庄屋 佐兵衛印
清水殿御領知
同劔山辺郡西井戸堂村
庄屋 兵 藏印
藤堂和泉守殿領
同劔十市郡谷村
庄屋 長兵衛印
松平甲斐守殿領
同劔式下郡吐田村
庄屋 義三郎印
船持惣代 平野屋庄七印
新劔先船惣代 三崎勝藏印
古劔先船惣代久々知屋利兵衛印
同筆頭 大和屋儀兵衛印

西御奉行様

「和州百姓惣代共」が訴状に記し問題として指摘していた「順番積并休船之義」²⁴⁾については、「不行届」のため願下げとなったものの、最大の争点となっていた荷揚げの変更および積荷駄数（刎荷）をめぐる問題については、「和州百姓」側の要求通りに決着が着いたのである。こうして、ほぼ所期の目的を達成した「和州百姓惣代共」＝「大和国中惣百姓惣代」5名は、大坂町奉行からの「御返翰」を携えて、12月17日に奈良奉行所へ帰国の挨拶に出向き、翌18日に文書で本件の結果を報告した。出訴してから4か月で結審したことになるが、問題が発生した時点からすれば1年半近くの時を要して、ようやく一件落着に至ったのである。

Ⅱ 劔先船国訴の組織過程

では、この国訴はどのように準備され、どのようにして組織結成が行われていったのか——この問題についてつぎに検討を加えよう。

本国訴の準備過程で、当初大きな役割を果たしたのは、高取藩預所の年預たちであった。劔先船問題について肥屋仲間から詳しい事情を聞いた彼等は、天保12年10月22日付で、急拠つぎの

ような廻状を廻した²⁵⁾。

以廻章得貴意候、寒冷相催候處、各々様愈御壮榮ニ被成御勤奉寿候、然者大和川筋剣先船一儀ニ付、最寄肥屋中色々心配被致候得共、今一段難行届趣被申出、右ニ付各々様方篤と御懇談仕度義御座候間、来ル晦日八木村木原屋嘉右衛門方夕着之積り、御出席可被下候、委細之義ハ初顔之節可申述候、尤飯時ニ相成候得者、乍御面倒此使之者江一飯御振舞被下度、尚又暮ニおよび候得者一宿御頼申上候、右ハ以書中得御意度如斯ニ御座候、已上

子十月廿二日

高取御料所年預

十市郡新賀村 佐右衛門印

式下郡年預鍵村 勘左衛門印

高市郡年預常門村 清左衛門印

（五條代官所）

葛上郡小殿村弥右衛門様

（大津代官所）

葛下郡曾根村嘉兵衛様

（郡山藩領）

廣瀬郡但馬村高井嘉平次様

但其御領分之内ニ而今御忝人御差図之上御同道可被下候

（旗本平野氏領）

（十市郡）田原本村小西弥太郎様

（大津代官所）

平群郡立野村平兵衛様

（大津代官所）

同郡宮堂村宗次郎様

（郡山藩領）

添上郡六条村上田庄治様

（柳本藩領）

^(上)
式下郡東田村森本文右衛門様

（芝村藩領）（山辺郡）

郡失念新泉村武右衛門様

（津藩領）

十市郡桜井村西田伝三郎様

（津藩領）

同郡生田村高瀬文作様

表 2 剣先船国訴準

所 領	第 1 回集会(天保11年 10/30~11/1)	第 2 回集会(11/10 ~12)	第 3 回集会(天保12年 1/18~19)	第 4 回集会(1/28 ~29)
高取藩預所	年預 常門村清左衛門 ゝ 鍵村勘左衛門 ゝ 新賀村佐右衛門	ゝ ゝ	ゝ ゝ	ゝ ゝ ゝ
木村惣左衛門代官所	宇陀町九郎兵衛代 弥治郎	宇陀町七郎兵衛	年預 半兵衛	ゝ
大津代官所	惣代 宮堂村宗治郎 ゝ 曾根村嘉兵衛 ゝ 立野村平兵衛代 九兵衛	ゝ ゝ 平兵衛	ゝ ゝ ゝ	ゝ ゝ ゝ
五條代官所	惣代 小殿村弥右衛門代 太兵衛	吉野郡惣代飯貝村 九左衛門		
清水領知	惣代 常盤村作治郎	作治郎代作右衛門	惣代 勝次郎	作治郎 井戸堂村作右衛門
津藩領	谷村庄屋 坂本長兵衛 池之内村庄屋 梅咲善八	ゝ ゝ	ゝ	ゝ
(久居方)	大福村 甚兵衛			
芝村藩領	大庄屋 勾田村中西小市郎	ゝ	ゝ	ゝ
柳本藩領	大庄屋東田村森本文右衛門 代武右衛門	代森本文右衛門	大庄屋 柳本村八左衛門	柳本村吉兵衛・弥助
郡山藩領			惣代 斎音寺村源右衛門 ゝ 吐田村義三郎 ゝ 金剛寺村伝兵衛	ゝ ゝ ゝ
高取藩領			大庄屋 小房村猪左衛門 ゝ 醍醐村庄左衛門	ゝ ゝ
柳生藩領				中村安兵衛
小泉藩領				小泉村幾蔵
旗本神保氏領	惣代 土橋村山崎伊兵衛代 權平	山崎伊兵衛 御坊村文六	惣代 新六	文六
旗本平野氏領		俵本村小西弥太郎		
旗本佐藤氏領		新木村村井藤兵衛		ゝ
旗本赤井(五郎作)領		南浦村庄屋代九兵衛	惣代 南浦村源十郎	ゝ
旗本水野(延四郎)領		西之宮村平蔵		
旗本水野(石見守)領			惣代 法貴寺村兵四郎	武蔵村庄七
旗本多賀氏領		大福村北橋兵衛		
旗本村越氏領			惣代 十市村惣次	
旗本山口氏領			惣代 備前村友右衛門	ゝ
多武峯社領				百濟村嘉兵衛
(肥屋共惣代)	5 名	5	2	2
(立野村・藤井村 荷物問屋)	名 1 名	各 1	各 1	各 1

(備考) 註10)の坂本長兵衛・中西小市郎の記録から作成。

天保期国訴の組織過程（谷山）

備集会（等）出席者

（第1回出坂 2/15～23）	第5回集会（3/15 ～18）	（第2回出坂 4/2～9）	第6回集会（4/18 ～19）	15人物代 （5/10～11決定）	国惣代（出訴惣代） （5/10～11決定）
			〃		
（佐右衛門 伴佐兵衛）	佐右衛門	（佐右衛門 伴佐兵衛）	佐右衛門	佐右衛門	佐右衛門
（高田村孫助）	〃	（ 〃 ）	〃	半兵衛	
	〃		〃		
（ 〃 ）	〃		〃		
	〃		〃		
	額田部村嘉兵衛	（ 〃 ）	〃	嘉兵衛	嘉兵衛
（作治郎代 弟作五郎）	〃	（ 〃 ）	〃	作五郎	作五郎
（ 〃 ）	〃	（ 〃 ）	〃	長兵衛	長兵衛
（ 〃 ）	〃	（ 〃 ）	〃		
	弥助		大庄屋 勝井 八左衛門	小市郎	
	（池嶋）〃	（ 〃 ）	〃	弥助	
（新野 〃 ）	〃		〃	源右衛門	
（福井 〃 ）	〃	（ 〃 ）	〃	義三郎	義三郎
	（前部）〃		〃	伝兵衛	
	（森本）〃		〃		
（ 〃 ）	中村安兵衛 大庄屋柳生森権左衛門	（中村安兵衛）	〃	庄左衛門	
	〃		〃	安兵衛	
	〃		〃	幾藏	
	〃			文六	
	〃			弥太郎	
	法貴寺村兵四郎				
	（上田）〃				
	〃				
（ 1 ）	1				
（代人 各1）		（代人 各1）	代人 各1		

(久居藩領)

同郡木之本村西岡弥右衛門様

(旗本神保氏領)

高市郡土橋村山崎伊兵衛様

(清水領知)

十市郡常盤村作治郎様

(木村惣左衛門代官所)

(宇陀郡) 宇陀町七郎兵衛様

(木村惣左衛門代官所)

(宇陀郡) 宇加志村弥十郎様

尚々賃錢之儀、御壺人ニ五分懸御渡し可被下候

宛先に名前があがっているのは計16名、それぞれの所領名を付記しておいたが、いずれも大和の主だった所領の大庄屋・惣代庄屋クラスの者達である（これ以外にも、大和国内には、高取藩領・柳生藩領・小泉藩領・新庄藩領・興福寺領といった主だった所領が存在したが、それらの関係者の名前はここには見い出せない）。

この招請をふまえて、十市郡八木村の旅宿屋木原屋嘉右衛門方で、10月晦日から11月朔日にかけて、剣先船問題をめぐる第1回の集会がもたれた。これに出席したのは、表2に示した4分の幕領および6所領の代表15名（先の廻状との関わりで言えば、旗本平野氏領の代表の姿が見えず、代人が出席した所領もいくつか存在した）、肥屋共惣代5名、立野村と藤井村の間屋各1名、の計22名であった。

この集会の場で、肥屋共惣代と問屋両名から本件についての事情説明があった後、本会を主催した高取藩預所の年預共は、出席した各所領の代表に対して、「其国難捨置かたくニ付、國中申合、大坂表舟持共江先規之通相守候様之引合致し、自然難相分り候ハ、歎訴仕度、此儀如何」と問いかけて意見を徴したが、代人であるため即答できないとするケースもあって、結着がつかず、結局11月10日に再度集会を開くことになった。その際、高取藩預所の年預共は、参会者に対してつぎの2点を依頼した。第1は、天明度の国訴の際の経験を教訓にして、今回は「先書面相認、加談之調印取之候上、惣代名前其外万事取極り申度間」、今回の集会には印形持参にて代人ではなく本人が出席するようにしていただきたいという点、第2は、本件は「国中一方一体」に関わる事柄であるから、今回不参の所領（「此度相洩候村々」）へも「其最寄ヘ」連絡して参加を呼びかけ、次回には出席いただけるようにしてほしいという点である。

この第2の点に関して、旗本水野延四郎・赤井五郎作・佐藤美濃守領への連絡を頼まれた津藩領の惣代らは、11月6日付でつぎのような廻状を廻していることが判明する。

廻章を以得御意候、然者大和川剣先船之儀ニ付御料惣代中々被申越候筋御座候ニ付、急々御咄申度存候間、明七日四ツ時桜井村大福屋藤兵衛宅江御出可被下候、委細ハ其節御咄申可述候、已上

子十一月六日

谷村庄屋 坂本長兵衛印
池之内庄屋 梅咲善八印

多賀様御知行所方大福村

佐藤様御知行所方西之宮村

（旗本赤井氏領）南浦村

（旗本水野氏領）浅古村

大岡様御知行所方忍坂村

右村々

庄屋
中様
年寄

尚々今日之人足賃錢一ヶ村ニ五分懸御渡し可被成候

また、第1回の集会をふまえて、各所領では、「領分寄合」が開かれるなどして、次の集会にむけての対応方針が定められていった。芝村藩領では、さきの集会に出席した大庄屋の中西小市郎が、帰村の翌日＝11月2日に会談の内容を芝村役所に報告するとともに、8日には本件をめぐって芝村の会所で「領分寄合」が開かれた。その詳しい内容はわからないが、小市郎は「役中諸事覚日記」に、「芝御領分寄合、十一月八日、御領分宜敷取斗呉候様申居候事」と記している²⁶⁾。

一方、津藩領では、最初の集会開催についての廻状が届いた時点から、大庄屋が対応の仕方について領主側に報告して指示を仰いでいたが、代人として出席した坂本長兵衛・梅咲善八の両名は、帰村すると早速に大庄屋方へ出向いて会談の内容を報告し、さらに坂本長兵衛は、大庄屋の窺書などを携えて、古市役所へ赴き、口上にて会談の内容を報告するとともに、今後の対応の仕方について指示を仰いでいる。この時、同役所の手代山中金治が指示したのは、「大和国一体之儀ニ候得者、破談ニ相成かたく、孰れ加談可致心得、乍併御領下之儀者加談たり共随分先達へかす、^{（ら脱力）}万事控ニ可致事、尚又加談調印之儀者、御領下場広く候事故、今以何ヶ村と申治定出来かたく、尤御領下之内ニも右肥ヲ不用山中村方有之候間、取極追而調印可致と申答置候事」「惣代之儀、御領下之内何ヶ村加談と取極候上、たれと申儀申出へくと申答置候事」などの点であった。

こうした動きだけをとり出してみると、同領における大庄屋以下の村役人層の主体性のなさ

が目につき、気にかかるが、「御領下之儀（ら敷力）者加談たり共随分先達へかす」とした手代山中の指令にもかかわらず、この後、谷村庄屋の坂本長兵衛が、本件に積極的に関与し、「国惣代」の一人として活躍するに至っている点に注目しておく必要がある。

さて、こうした各所領での準備をへて、11月10日から12日にかけて、前回と同じく八木村木原屋嘉右衛門方で第2回の集会が開かれた。出席者は前掲表2に示した26名で、前回に比べれば、久居藩領の代表の姿が見えなくなったものの、前述した津藩領の惣代らの尽力もあって、新たに5つの旗本領の代表が顔を見せた。

本会では、高取藩預所の年預2名と大津代官所の惣代1名が進行役を務め、まず「前会ニ申談置候通、加談調印被下候歟」と参会者に問いかけた。これに対して、他の所領、特に当国では「領地多分」の郡山藩領（大和国内では8万8750石）と高取藩領（同2万5000石）の代表の姿が見えないのはどうしたことなのか、という声があがり、高取藩預所の年預から、双方とも不参であるが、郡山藩領は「御料所始藤堂家其余一統御談振同意」、また「高取御私領方ハ御料方同意」である旨、説明が行われたが、参会者「一統」の納得はえられなかった。「孰れも印形持参ニ候得共、当国ニおゐてハ、郡山公領地多分之所、会談承知之趣ニ而不参不相心得候間、先ツ此度調印不承知ニ候間、此上郡山并高取御私領方とも得と御取極置被下、弥右両家加談承知之上、重而之出席ニ被罷越候儀ニ候得者、一統調印可致」というのが「一統之申口」であり、結局、高取藩預所の年預から郡山・高取両藩領へ代表者の出席を促し確約をとった上で、改めて集会を開くことに決した。本件を成功裡に導くためには、大和在藩のなかでは所領規模で第1位・第2位を占め、石高合計で大和の総石高の20数パーセントを占める両藩領の加談が、何としても必要だったからである。

このほか、高取藩預所の年預らから、公訴となった場合の惣代を12名とし、その内訳を幕領3名・郡山藩領2名・津藩領2名・清水領知1名・高取藩領1名・芝村藩領1名・柳本藩領1名・旗本神保氏領1名²⁷⁾としたいので、それぞれの所領で誰を惣代とするかを決めて、今回の会合に臨んでいただきたい、等の依頼が行われ、本会を散会した。

3回目の集会は、翌12年の正月18日から19日にかけて、八木村の木原屋で開かれた。本会には、前回に問題となった郡山・高取両藩の代表も姿を見せたが、高取藩領からは2名の大庄屋が出席したのに対し、郡山藩領からは3名出席したものの「大庄屋衆」ではなく「惣代衆」であったため、芝村藩領の大庄屋中西小市郎らから「去冬両度とも不参、此度迎も大庄屋衆出張無之、何角存意も可有御座」やと、不満の声があがり、さらに、論所となっている「字亀瀬辺（魚梁）・藤井問屋杯」は「石原御代官所・郡山御領分場所」であるから、「何分ニも大津御代官所方年預・郡山方大庄屋得と談之上、頭取取斗無之候而ハ不都合」であり、まず双方で熟談して本件についての具体的方策を示していただきたい、との要望が出された。この要望をふまえて、本会の進行役を務めた高取藩預所年預十市郡新賀村佐右衛門・大津代官所惣代葛下郡曾根

村嘉兵衛は、来る28日の夕刻に改めて集合することにしたい、「其節郡山方大庄屋も被出候義_ニ付、万端熟談之上、一統承知之調印有之候様致度」と申し述べ、閉会を宣した。

第4回集会は、予定どおり、同月28日から翌日にかけて、木原屋で開かれた。本会には、柳生藩領・小泉藩領・多武峯社領の代表も初めて姿を現し²⁸⁾、陣容はかなり整った。なお、郡山藩領の代表は前回と同じメンバーであり、いかなる事情によるのか、「大庄屋衆」はまたもや姿を見せていない（ただし、今回はそのことを糾弾する声は表立ってはあがっていない）。

本会では、高取藩預所の年預2名が進行役を務め、まず、大津代官所および郡山藩領の惣代に対して、「能キ考之筋も有之ハ承り度」と、前回の宿題への回答を要請した。これに対する両所惣代の返答は、「全論所辺ハ支配_ニ候へ共、別_ニ考も無之故、受以取扱候義ハ難出来、何分一統熟談いたし貫度」というものであり、これについて、「彼是」意見も出たようだが、結局「一統熟談」という形で以後の議事が進められていくことになった。その結果、本会では以下の点が確認された。

- ①公訴に及ぶ前に「大坂舟持方」と和談の交渉を行う。
- ②出坂して交渉にあたる惣代の人数は9名とし、その内訳は郡山藩領2名、津藩領1名、高取藩預所と同藩領で1名、清水領知1名、芝村・柳本両藩領で1名、柳生・小泉両藩領で1名、大津代官所1名、旗本神保氏領1名、とする。
- ③出立日は2月15日とする。
- ④出役に伴う費用は「壱人分日役雑用壱日_ニ銀七匁五分宛」、「往返荷物人足料拾匁_ニ」とする。
- ⑤それらの費用の負担方法については、今回は加談所領で高掛りで負担することとし、もし支障があるようなら検討しなす。

さらに、運動を展開しようとするに際して、結束の強化をはかり統一戦線を維持することをねらって準備・作成された、前文に下記の誓約文が記された帳面（「連印帳」と呼んでおこう）が、「御料惣代」から「出会之人々」へ示され、これへの加談調印が要請された。

連印申合之事

一此度剣先船之者共、去ル天明之度御申渡し之御意相背、肥類其外諸荷物共登り積入相減、我儘之取斗仕候_ニ付、自然肥類及延着、当国百姓肥仕込時節旬後_ニ相成、甚々難渋弥増、此儘捨置候_ニ而ハ立毛実乗無数道理_ニ相成、終_ニ御取箇_ニ相響、奉対御上様江申訳も無之_ニ付、一同申談之上、右船持共へ及引合、先規在来之通り壱艘_ニ付拾六駄積致候ハ、格別、無左候ハ、及公訴可申積り、然ル上者諸入用等相掛り候故、右入用銀之義ハ夫々高割賦可致筈_ニ相締候上ハ、聊約定之通り違変中間敷候、為後証連印依_ニ而如件

天保十二年_丑壬正月廿九日

この時即座に「加談承知調印」したのは、新賀村佐右衛門・常門村清左衛門（高取藩預所）、曾根村嘉兵衛（大津代官所）、宇陀町半兵衛（木村代官所）、常盤村作治郎（清水領知）、斎音寺村源右衛門（郡山藩領）、勾田村小市郎（芝村藩領）、の7名であった。他の所領代表は「近日調印可仕筈」ということであつたが、この後、それまで開かれた4度の集会に1度も参加しなかった所領も含めて、「連印帳」に調印する所領が増え、3月の時点では、表3に示した31の所領（幕領については代官所〈預所〉単位に計算した）が戦列に加わるに至っていることが判明する。

その数は、大和の全所領の約4分の1を占めるにすぎないが、新庄藩領や興福寺領などを除く、国内の主だった所領のほとんどが名を連ねており、加談所領の石高合計（31万5928石）は、大和の総石高の60数パーセントに達している。さらに、ここで留意しておかねばならないのは、ともに幕領の例だが、木村代官所管下の村々のうち石高合計で2万5000石ほどが「極山中」付加談せず、また第2回集会までは代表者を送っていた五條代官所管下の村々が「其田畑南勝手」付亀瀬藤井河岸迄乗越候荷物不遣」という理由で本件から手を引いていったことから窺われるように、大和国内には、商品流通面で大和川舟運と関わりを有さない、ないしは関わりが大変薄い地域も存在したという点である。上記史料にあるような「極山中」や、宇智・吉野郡のように吉野川水運との結びつきが強い地域＝吉野川グループ、盆地最北部のように木津川水運との結びつきが想定される地域＝木津川グループ、などがそうであり、そ

うした地域を除く大和川商品流通圏に属する村々＝大和川グループの石高合計を分母にして計算すれば、加談所領のそれが占めるパーセンテージはさらに上昇することになるのである。この点をたとえ考慮の外においても、大和の主だった所領のほとんどが戦列に加わり、石高面か

表3 天保12年3月段階の加談所領・石高

所 領	石 高
高 取 藩 預 所	48030石余
大 津 代 官 所	22000 余
木 村 代 官 所	5000 余
清 水 領 知	18695 余
郡 山 藩 領	88750 余
津 藩 領	42338 余
高 取 藩 領	25000 余
柳 本 藩 領	10000
芝 村 藩 領	7851 余
小 泉 藩 領	7709 余
柳 生 藩 領	7209 余
神 保 氏 領	6066 余
平 野 氏 領	5004 余
水 野 氏 領 (石見守)	4999 余
山 口 氏 領	2500 余
多 賀 氏 領	2000 余
桑 山 氏 領	1200 余
佐 藤 氏 領	1021 余
水 野 氏 領 (監物)	1006 余
村 越 氏 領	1000 余
三 好 氏 領	700 余
赤 井 氏 領 (五郎作)	685 余
武 藤 氏 領	520 余
赤 井 氏 領 (岩次郎)	300 余
赤 井 氏 領 (金十郎)	300 余
鈴 木 氏 領	300 余
多 武 峯 社 領	3000 余
法 隆 寺 領	1000 余
内 山 寺 領	971 余
当 麻 寺 領	310 余
興 福 院 領	200 余
三 輪 山 社 領	171 余
秋 篠 寺 領	100 余
計	315928石

（備考）註10)の坂本長兵衛の記録から作成。

ら言えば国全体の3分の2近くが加談するに至ったわけであり、国訴として運動を展開するための陣容は、ようやくにしてという感はあるが、なんとか整うに至ったと言うことができよう。

さて、第4回集会での申し合せにしたがって、公訴に及ぶ前に、和談の交渉が行われた。2月15日に魚梁問屋方に集合した「船持方へ掛ヶ合惣代」9名（前掲表2参照）と肥屋惣代1名、魚梁・藤井両問屋の代人各1名は、論所である亀瀬付近を見分し、国分で1宿した後、翌16日に大坂に到着、肥屋積方年行司と対談し剣先船仲間との仲介を依頼した後、20日から22日にかけて、連日天満白屋町の船会所へ赴いて、剣先船仲間の代表者らとの間で本件について協議を行った。そこで、双方の意見が対立するなか、古剣先船組頭久々知屋利兵衛から、大坂からの船荷物を青谷で荷揚げするとしたらそこから魚梁・藤井両問屋までの駄賃は1駄につき3分5厘ほどかかるだろう、その3分5厘のうち1分を「船人」、1分を「和碁方問屋」、1分5厘を「大坂和碁肥屋」で負担するようにしたらどうだろうか、という案が示されたが、これに対して大和の両問屋の代人は「押而承知之儀申張り」、また剣先船の「船人共」の側も「熟も承知不仕」、採用されるに至らなかった。結局、和談の交渉は不調に終り、一行は23日に帰国した。

この出坂交渉の結果をふまえ、対応策を協議・決定するために、3月15日から18日にかけて、八木村の本原屋で、5回目の集会が開かれた。出坂惣代からの報告に続いて、今後の方策についての協議に入り、出席者の意見が徴された。当初は、「唯公訴而已申談し居候而、和熟之儀申出候もの無之」と坂本長兵衛が記しているように、公訴に及ぶべしとする意見ばかりが続いたが、「和熟相調不申、弥公訴も相成候而ハ、無益之雑費いヶ程歟難斗」として、「和熟之儀専一」に相考えるべきであると、坂本長兵衛が発言するに及んで、全体の空気がこれに傾き、「公訴ハ望所ニあらず、和済ハ好所ニ付、今一度和済之駄ヶ合可然」ということで、再度和談の交渉を行うことに決した。出立日は4月2日とし、出坂惣代の人数については、3～4人ぐら

表4 第5回集会時に提示された第3回集会以降の活動経費

銀 高	経 費 内 訳
839.71	閏正月18日から3月17日までのうち会谈3度分諸入用、八木村木原屋へ支出
32	茶代金200疋、八木村木原屋へ支払
630	大坂剣先船仲間と和談の交渉のため2月15日から23日まで出坂諸入用（9日分の日役9人分と人足賃の合計）
35	茶代、大坂の旅宿へ支払
32	新賀村佐右衛門からの連絡費（「諸方江引合ニ付諸入用」）
20	常盤村作治郎からの連絡費
5	額田部村嘉兵衛からの連絡費
5	金剛寺村伝兵衛からの連絡費
10	谷村坂本長兵衛からの連絡費

（備考） 註10)の坂本長兵衛の記録から作成。

いでもよいのではないかという意見も出されたが、「此度之出坂^者和濟調不調之一大事之駈ヶ合」であるとの認識のもと、前回同様9名に定まった。

また、本会では、集会や出坂に伴う経費の負担方法についても協議され、「去冬兩度之会談入用」については「自分払」とし、「当春之会談入用^并出坂之日役其余仕払銀」（合計と内訳は表4参照）については加談所領で「惣高割」することに決った。公訴となった際の経費の負担方法についても意見が徴され、魚梁・藤井両問屋を経由する上り・下りの諸荷物にそれぞれ駄数に応じて割りかけてはどうかという声があがったが、これについては後会にもちこされることになった。

これより約半月後の4月2日に予定どおり出立した出坂惣代9名（前掲表2参照）と魚梁・藤井両問屋の代人各1名は、翌3日に剣先船仲間へ「今一度和熟之掛ヶ合」を申し入れ、4日・5日・6日・8日と天満の船会所へ足を運んで、協議を重ねた。その際、「大坂方」からは、我々が亀瀬手前の3町ほどの間は「実以通船出来かたく候」と訴え出ているのに対して「和劬方」は「急度通船出来候」と申し立てられているが、「双方乗り合^ニ而ためし乗」を行い、通船できるかできないかを判定した上で、改めて協議したらどうだろうか、という要望が出され、また「和劬方」からは、①青谷へ「遊船」を「拵置」、ここで積荷の半分＝8駄を「遊船」に積みかえて、青谷～亀瀬間は「遊船」とともに8駄積で積み登ってはどうか、②特に「通船六ヶ敷場所」を「手厚^ニ普請」したらどうか、③剣先船のうち現在「休船」となっている60艘を荷物運送用に当方へ貸し下げてはもらえないか、という申し入れが行われたが、いずれも双方納得には至らず、結局2度目の和談交渉も不調に終わった。

この対談を仲介した大坂の肥屋積方年行司は、散会の前に、「和濟も相調不申、弥公訴と双方之御申分歟^ニ候得共、右一件公訴^ニ相成候^{而ハ}、双方共無益之雜費いヶ程か難斗」と述べ、「大坂方」でなお検討を重ね、それをふまえて15日に田原本村まで赴き、再度相談に及びたいと申し入れ、「和劬方」もこれを了解して、9日に帰国した。その後、大和へ赴く日どりを18日まで延ばしてほしいとの申し入れがあり、会合場所も八木村の本原屋に改められたようである。

第6回集会は、その4月18日に、同所で開始された。この日の夕方に大坂の肥屋積方年行司も参着するという約束であったが、結局姿をあらわさず、翌日になって、今井町の肥屋から、努力をしたが「大坂方」の主張は変わらず、他に良い考えもないため失礼ながら欠席させていただく、との大坂の肥屋積方年行司からの書状が披露された。ここに至って、「弥公訴」と決し、以下の点が確認された。

①常盤村作五郎・曾根村嘉兵衛・吐田村新野儀三郎の3名が、「相手取候者共町役人江申届ケ^ニ」23日に大坂にむけて出立する。

②3名が帰国次第「惣参会」を開き、「公訴日限」を決定する。

③出訴惣代は、天明の出入の際には9名であったが、今回は6名ぐらいとする。

このほか、出訴費用の負担方法についても協議され、散会となった。

第7回集会は、5月2日から3日にかけて、田原本村の鍵屋五兵衛方で開かれた²⁹⁾。本会の開催を知らせるため、1日に廻された急廻状に、「此度之参会ハ公訴一条ニ付石礎第一ニ御座候間、何分ニも御本人様御出會可被下候」と記されているように、重要な集会であったが、招集が急だったこともあって集まりが悪かったためだろうか、あるいは本会で協議し合意した内容を成文化（後掲の「申定書」参照）するために時間をおいたのであろうか。公訴にむけての重大事項はつぎの集会で決議されている。

その集会（第8回集会）は、5月10日に開催され、以下の事項が決定された。作成された「申定書」の内容を示しておこう。

申定書

一雑費入用出銀之訳

高取御預り所	常門村	清左衛門
	新賀村 ^(佐)	左右衛門
石原様御支配所	宮堂村	宗次郎
	曾根村	嘉兵衛
清水様御領知	井戸堂村	作兵衛
藤堂様御領分	池之内村	善八
郡山様御領分	齋音寺村	源右衛門

右五ヶ所惣代申合、諸荷物ニ割懸ケ、肥屋年行司と申談之上月々ニ取集置、六月十一月両度惣参会ニシテ取集候訳并銀子共其席江及出銀ニ可申事

但シ出入中郷宿仕払差延し置候而不苦分ハ、年両度惣参会後仕払ニおよひ可申筈、若臨時入用之儀出来候ハ、其五ヶ所惣代共シテ出銀致可申事

一右件訴訟方之訳

高取御預り所	十市郡新賀村 ^(佐)	左右衛門
石原様御代官所	平群郡額田部村	嘉兵衛
木村惣左衛門様 ^(御代官所)	宇陀郡宇陀町	半兵衛
清水様御領知	十市郡常盤村	作五郎
藤堂様御領分 ^(和泉守)	十市郡谷村	長兵衛
松平甲斐守様御領分	式下郡吐田村	義三郎
	広瀬郡齋音寺村	源右衛門
	十市郡金剛寺村	伝兵衛

植村出羽守様御領分 高市郡醍醐村 庄左衛門

織田大和守様御領分 式上郡柳本村 弥 助

織田丹後守様御領分 山辺郡勾田村 小市郎

柳生但馬守様御領分 同郡中村 安兵衛

片桐石見守様御領分 添下郡小泉村 幾 藏

平野兵庫介様御知行所 十市郡俵本村 弥太郎

右拾五人惣代 新賀村 ^(佐) 左右衛門

常盤村 作五郎

額田部村 嘉兵衛

谷村 長兵衛

吐田村 義三郎

右惣代拾五人罷出可申筈ニ候得共、多用之入用ニ相成候^(国中)而者一躰之難決ニ付、先日五人ニ相定及出入可申筈ニ候得とも、自然右五人之内差支候義出来候ハ、右十五人之内各相代り可申事

一右件ニ付南都出日限

但し右日限追而相定可申事

一大坂御奉行所様江罷出候節惣代五人^(町)

其御地頭所々別段御願之御添書御遣し被下候様相願可申筈之事

一諸費入用取集方、肥屋年行司と申談、来ル十三日八木村木原屋嘉右衛門方江出席ニ相定、此義今朝肥屋年行司江廻章ニおよひ置、尤五ヶ所惣代早々罷越、年行司江申談書一点書ニ相規ニおよひ候申合ニ付、早々出席可致筈之事

決定事項のうち、重要な点の第1は、出訴惣代についてで、まず15名の惣代が定められ（石高の多い郡山藩領から3名、他の5000石以上の加談所領からは各1名）、そのうち5名が出訴惣代と決められた。新賀村佐右衛門（高取藩預所）・常盤村作五郎（清水領知）・額田部村嘉兵衛（大津代官所）・谷村長兵衛（津藩領）・吐田村義三郎（郡山藩領）の5名で、別の史料では「国惣代」とも称されている。この5名の誰かに支障が生じた場合には、「拾五人惣代」のうちから補充するという定めであった。出訴惣代がこのように5名に限定されたのは、史料に明記されているように、出訴に伴う経費の軽減をはかるためであり³⁰⁾、運動主体の合理的思考をそこに見い出すことができる。

決定重要事項の第2は、会計に関してで、担当の「五ヶ所惣代共」7名が決定されるとともに、出訴費用を中心とする「諸費入用」は（加談所領で石高割にするのではなく）「諸荷物」に割りかけるようにし、会計担当の惣代達が肥屋年行司と相談のうえ月々に取り集めおき、年

両度の「惣参会」の場へ持参するとともに決算報告を行うようにすること，が決められた。

この集会から1か月余を経た6月16日には、「大和国惣代」から剣先船会所へ，出訴にふみきる旨を通告し，相手名前の確認を以下のように行っている³¹⁾。

引合書

古剣先船筆頭	大和屋儀兵衛
同組頭	久々知屋利兵衛
同組頭	播磨屋源兵衛
新剣先船惣代	三崎勝藏
尼崎又右衛門手代	中川新兵衛
船頭老分	石川屋伊兵衛
同断	中屋市右衛門
同断	延屋徳右衛門
同断	京屋伊兵衛
同断	塩屋弥右衛門
同断	さぬき屋金兵衛
年行司	平野屋庄七
同断	播磨屋嘉七

一大和川通船剣先船荷物積方先規御裁許も度々被為有候義を，此度自儘之取斗仕_ニ付大和国難_ニ相成，無據右人数相手取御当地御奉行所様へ御訴詔奉申上度候間，前書名前之衆中調之上否奥書御調印可被下候，以上

天保十二_丑六月十六日

大和国惣代

松平甲斐守殿御領分

広瀬郡斎音寺村

庄屋 源右衛門

石原清左衛門殿御代官所

平群郡額田部村

庄屋 嘉兵衛

剣先船

御会所

前文御引合之趣夫々相廻し候処，全御裁許相背自儘之取斗可仕様毛頭無之候得共，前々_ハ川並悪敷相成働方実々難_ニ付，無據先達_而及掛候処，何分先方御疑念有之哉，行届兼候故，

可相成義^(二脱カ)=候ハ、今一応御勘弁預り度旨被申出=付、右之段奥書調印可仕候、已上

丑六月十八日

剣先方
船会所^⑩

剣先船会所からは「今一応御勘弁預り度」(奥書の記載)とのことであったが、もはや出訴にむけての流れは止まらなかった。しかし、経費負担の方法をめぐる新たな問題が生じたため、出訴に至るまでにはなお時間を要した。すなわち、さきの「申定書」では、出訴費用を中心とする「諸費入用」は「諸荷物」がかりで負担することに決められたが、これに対して魚梁問屋安村靱貞から反対の意向が表明されるに至り、その「引逢」に時間を費すことになったのである(この間、集会〈第9～11回〉もくり返し開かれ、この問題についての対応策などが主に協議された)。「荷物掛り」を「不承知」とする安村の意向は強く、再三の「引逢」の結果、ようやく妥協線が見い出されるに至り、当初の方針を変更して、「諸費入用」の半分を「荷物掛り」とし、残り半分は加談所領で石高割にすることに決した³²⁾。こうして、経費負担の方法をめぐる問題もなんとか解決し、7月18日に田原本村で開かれた第12回集会では、奈良奉行所への出訴の日とりも定められるに至った。8月7日が出訴の予定日とされたが、「南都方=而斗手間取」、実際に出訴に及んだのは、前章で述べたように8月18日のことであった。

以上、出訴に至るまでの、問題の発生時からすれば1年余にわたる(他の国訴と比べれば実に長い)動きを、長々と記してきたが、それらをふまえて、本国訴の組織構造面を中心に、注目できる点をここでまとめておきたい。

(1) 出訴に至るまでに都合12回の準備集会が開かれたが、この集会の場が本件についての運動方針を定める最終決議の場になっていた。この集会に出席したのは、大和国内の主だった所領を中心とする各所領の大庄屋層(大庄屋・年預・惣代庄屋など所領によって呼称は異なるが、村落行政組織の頂点に位置する存在である)³³⁾もしくはその代人であり、彼等は自らの属する所領の惣代として、領分の意向をふまえて本会に出席していた。そうした彼等が、「廻状」を伝達手段とする各所領惣代間のネットワークの存在を前提に、何度も会同して協議を重ね、国訴を準備していったのである。国訴の惣代も、彼等が出席した対策会議の場で——まず「拾五人惣代」(5000石以上の加談所領の惣代によって構成される)を定め、出訴に伴う経費の軽減をはかる目的で、さらにこれを絞りこんで5名の「国惣代」を決めるという手順で——最終決定されたのである。

(2) 本件についての最初の集会では、国内の主だった所領の惣代がまず集って方針を討議し、しかる後に、小さな所領に対しては、会合に出席したその「最寄」の所領惣代から参加を呼びかけるという形で運動の輪の拡大がはかられていった(この後、集会には参加していなかった小所領に対して、「連印帳」への調印依頼が行われた際にも、この方式が用いられ

たのではないかとと思われる。また、本国訴に引き続いて翌13年に展開された「国訴」の際にも、同様の方式がとられていることが判明する³⁴⁾。当時、大和国は130余もの領主に分割領有されており³⁵⁾、国内には所領規模の小さな旗本領そして寺社領も数多く存在していた。そうした所領をも陣営に組みこみ、運動組織（基盤）の拡大をはかろうとするに際して、³⁶⁾地縁、が活用されていることが確認できるのである³⁶⁾。しかし、それは、抽象的な言い方をすれば、基幹部分ではなく枝葉部分の組成に関わる局面においてであり、組織結成上補助的な役割を担うに止まるものであった。また、³⁷⁾地縁、にもとづいて郡中の惣代という形で惣代が出されることもなかった（この点、摂河の場合とは異なる）。

(3) 大和の肥屋仲間から問題をもちかけられて³⁷⁾以降、「国惣代」の決定に至るまで、集会の開催通知を行う廻状元＝招集役として、また集会時の進行役として、一貫して「頭取」としての役割を果たしたのは、高取藩預所の年預をはじめとする幕領の惣代らであった。また、彼等は「国惣代」5名のうち2名（会計担当者は7名のうち4名）を占め、その後も本件をリードした。このように幕領の惣代らが主導性を発揮しえたのは、①大和国の所領構成において幕領の比重が大きかった（国高約50万石のうち約4割が幕領で群を抜いていた）、②すでに文化3年に「大和国惣百姓」の意向を代弁する形で「国訴」を展開³⁸⁾し、また文政9年にも一国の幕領全体が結集して名目銀等の貸付規制運動を展開³⁹⁾するなど、かねてより広域的訴願闘争を積極的に展開して多大の成果をあげてきていた、ことによるものと思われる⁴⁰⁾。

以上指摘した3点のほか、①運動への参加を呼びかけ結集をはかろうとする際に、「国難」⁴¹⁾という用語がキーワードとして提示されていること、②結束を固め統一戦線を維持するために「連印帳」が作成され、また国訴の展開に際しては「申定書」が作成されて重要事項が明文化されていること、にも注目しておきたい。

お わ り に

最後に、国訴後の動向について、注目されるところを2点指摘し、本稿を終えることにしたい。

第1は、本国訴終結後もしばらくの間はその組織体制が維持され、「国難」が生じた際に「国惣代」が活動している例を見い出せる点である。関係史料をまず以下に掲げよう。

〔史料①〕

益御安静ニ被成御座、珍重御義奉存候、然^レ剣先一件其外国難之始末御示談仕、百姓衰微ニ不相成様取究り度候間、来ル八日曉五ツ時揃ニ而八木村木原屋嘉右衛門殿宅江無間違御入来可被下候、尤酒飯とも申付置可申候、先^レ御案内可申上候、以上

三月朔日 二日九ツ時着

新賀村
国惣代 佐右衛門
常盤村 作二郎
吐田村 義三郎
夫與助

是迄之人数ニ相増、人数凡四十五人

但し惣代ニ罷出候人々ハ六日夕着

廻状三通ニ而相廻ル

〔史料⑥〕

三月廿一日暁六ツ時魚梁江大坂の荷物差送り候所、魚梁ニ荷物大支ニ相成候ニ付、大坂積方江四五日積留申遣し候趣相聞江、此節肥し荷物専之砌、国難ニ相成候ニ付、額田部村嘉兵衛殿・新賀村^(佐)左右衛門殿の急廻状夜通しニ相廻り候ニ付、同日廿一日五ツ時龍田猿屋喜六方江打寄、喜六方参り候所、七ツ時人数相揃魚梁江出掛候様申談し、其刻限雨降り出し候ニ付一宿仕、翌廿二日早々魚梁安村鞆履店江参り、奥野権蔵・岡田太蔵殿へ引逢之次第左ニ記ス

一荷支之事

一大坂船入人船両三日延引断之事

一荷物河原積ニ相成、雨濡不始末之事

一出入荷物跡送りニ相成、跡入荷物先送りニ相成候事

一荷物多分荒有之由之事

一船頭順番積ニ而、自延引ニ相成候事

一船数先年より減シ有之事

一荷届之砌船働人無数故、自然荷物延着之事

一蔵大破ニ及普請之事

一是迄仕来りト著乍申、土蔵ニ敷板無之、土辺江直積ニ付下積荒候事

メ九ヶ条

右魚梁店方奥野権蔵・岡田太蔵兩人江引逢一札書付取罷帰り書付之写し

①・②ともに、芝村藩領の大庄屋中西小市郎の「役中諸事覚日記」に記された、天保13年の、国訴の終結後数か月を経た時点の史料であるが、「国難」が生じた際に、廻状元として「国惣代」がなお活動していることが知られるのである。③は、魚梁問屋での「荷物大支」・荷物保管に関する一件であり、「国惣代」が中心となって、各所領惣代と連絡をとり、同問屋への交渉を行ったことがうかがわれる。「国惣代」のこの後の動向については、今のところ史料的に

明らかにすることはできないが、④の「国惣代」からの廻状による招集にもとづいて、3月8日に「國中御料私領共万石以上惣代参会」が開催され、そこでの協議をふまえて、その後「万石以下」の各所領の意向も確認した上で、幕領の4分惣代共が代表となって⁴²⁾、「大和國中惣百姓」の意向を代弁する形で、幕府が天保改革政策をおし進めるさなか、新たな「国訴」（要求内容は木綿織統制や墮胎禁止の触流し等）を展開するに至っている⁴³⁾、ことを付言しておく。

第2は、本国訴終結後の大和川舟運をめぐる動向に関してである。「I」の部分で、出訴後、剣先船仲間との再度の交渉でようやく和解が成立し、天保12年12月14日に大坂町奉行所へ「願下御断」書が提出されるに至ったことを述べたが、ちょうどその前日に、幕府は天保改革政策の一環として株仲間解散令を発していた。但し、同法令の文面に不明瞭な部分があったため、幕府は、翌13年3月2日に再度触を発して、「都而株札并問屋仲間組合杯と唱候儀、不相成段相触候処、右者十組外者不差構様心得違候者も有之哉相聞、不埒之事候、弥先達而相触候通相心得、十組外而も株札仲間組合等決而難相成候間、可存其趣候」⁴⁴⁾と、念を押すに至っている。

同年5月4日付の「清水様御領知之触写」⁴⁵⁾には、株仲間解散令をうけて、堺奉行所が、「当表之河州・和邇へ積送り候荷物ハ、大坂剣先船=限り石川・大和川筋を相送り候仕来=有之候処、向後ハ剣先船=不限、外勝手之船を以積送り候共荷主随意次第手広=運送可致候」と、触れ出すに至った事実が記されているが、その前後に、大和川舟運をめぐる、大きな変化が生じるようになったことが、以下の史料記載（大津代官所・高取藩預所・清水領知・郡山藩領・津藩領・旗本平野氏領の「村々惣百姓惣代とも」が奈良奉行所に提出した願書⁴⁶⁾の一節）から判明する。

（国訴終結後）大坂荷主気受も宜敷、百姓共之注文之肥も多罷成、亀瀬藤井迄着荷物段々相まし、駄賃も定直段通=相下ケ候上、当四月以来難有御趣意=付候而ハ、泉州堺表=において剣先同様一艘十六駄積三十艘通船御聞届=相成、専積送り候（中略）、右之通=御座候間、益々当国魚梁并亀瀬藤井両浜江着荷物多相成候（下略）

大和の百姓たちにとっては待望した事態が、一方、従来大和川筋の荷物輸送を独占的に行ってきた剣先船仲間にとっては厳しい状況が、出現するに至ったのである。

- 1) 国訴研究史については、谷山「国訴研究の動向と問題点」（『新しい歴史学のために』194号、1989年）を参照されたい。
- 2) 『商品生産と寄生地主制』（東京大学出版会、1954年）105頁。
- 3) 『近世の商品流通』（塙書房、1962年）249頁。朝尾直弘氏の先行研究「文政六年千七ヶ村国訴にかんする覚書」（『近世史研究』2巻5号、1955年）に依拠した記述である。

- 4) 『近世の商品流通』285頁。
- 5) 「いわゆる『文政の〈国訴〉』について」(『ヒストリア』50号, 1968年, のち『近世民衆運動の研究』〈三省堂, 1979年〉に収録, 304~305頁)。
- 6) 『近世農村経済史の研究』(未来社, 1963年)279頁。
- 7) 「国訴の構造」(『日本史研究』276号, 1985年, のち『国訴と百姓一揆の研究』〈校倉書房, 1992年〉に収録)。
- 8) 藪田氏は、「自郡の惣代を頼むことによって、訴願と負担の関係を緊張に満ちた雰囲気の中で作ることによってスタートした国訴は、その後文政6年以降、骨組を幕領組合村制に依存することによって、常時1000ヵ村余の村々を結集することに成功する」(前掲書120頁)と指摘されているが、摂河の場合、「常時1000ヵ村余の村々を結集することに成功」した文政6年以降を国訴段階として把握すべきであろう(すでに津田秀夫氏は、文政6年国訴の画期性に注目され、それ以前は前国訴として把握すべきであると提唱されている〈註5〉と同, 298頁)。また、久留島浩氏が「近世後期の『地域社会』の歴史的 성격について」(『歴史評論』499号, 1991年)4頁で指摘されているように、文政6年を境に国訴の編成基軸が転換することの意味が問われなければならない。
- 9) 片山清氏が、「大和川筋剣先船と大和国百姓との運賃紛争百三十七年史」の一環として、本国訴(同氏は国訴という概念は用いられていない)の具体的経過について関係史料を紹介しつつ論じられている程度である(「住吉大社石文による地方史の発見(七)・(八)」〈『すみのえ』201・202号, 1991年〉。本稿の存在については、天理大学近江昌司先生の御教示をえた)。なお、筆者が提供した史料をもとに、前田美佐子氏が修士論文(1984年度, 奈良女子大学)のなかで言及されており、筆者もかつて「幕末・維新时期における村落『自治』と村落指導者層」(『史学研究』171号, 1985年)などで若干論及したことがある。
- 10) 津藩領十市郡谷村坂本長兵衛の「大和川筋剣先船一件ニ付出勤日記」(桜井市池之内, 梅咲直昌家文書), 大和郡山藩領式下郡吐田村新野義三郎の「大和川筋剣先船運送出入和州国中会合ニ付御領私領共惣代被差出候当御領分三人罷出候一件諸支扣覚」(川西町吐田, 新野シズ家文書), 芝村藩領山辺郡勾田村中西小市郎の「天保十_二三月ヨリ役中諸事覚日記」(天理図書館近世文書), 大津代官所平群郡額田部村嘉兵衛の「大和川筋大坂剣先船荷物運送差支ニ付和州国中百姓惣代共船方之者相手取出入一件控」(同, 「大和川筋剣先船出入諸事控」所収), など。
- 11) 『益軒全集』巻之七所収133~134頁。
- 12) 「和州百姓魚梁支配運賃何角出入写」(天理図書館近世文書)所載。
- 13) 水深の浅い川運航用の平底の船(長約17.5メートル, 幅約1.86メートル, 深約0.42メートル)で、船首を剣先状にとがらせているところからその名がある。
- 14) この呼称は、亀瀬の少し上流の船着場のあった付近を魚梁といったことに由来する。かつて、竜田神社に供える魚を取るために梁が設けられていた場所である。魚梁船の運航が開始されるようになったのは慶長15年のことで、平群郡内で約2万石の所領を与えられていた竜田藩主片桐且元が、年貢米を大坂に運ぶため、立野村の安村喜右衛門に命じて同船を製造させ、就航させたのを嚆矢とする。剣先船の就航以前には、直接大坂まで下っていたのではないかと想定される。船の構造は剣先船と同じであったが、やや小型であった。なお、魚梁船については、戦前の作品ながら、肥後和男氏のすぐれた研究(「近世に於ける大和川の舟運」〈『王寺文化史論』所収, 大和史学会, 1937年〉)があり、『三郷町史』上巻(1976年)に關係史料がまとめて収載されている。
- 15) 『三郷町史』上巻108頁には、「江戸中後期のものと思われる魚梁船の就航区域を示す絵図(天理図書館所蔵)では、竜田川・富川(現在富雄川)は、『此川水少なく舟登り不申候』と記載があり就運はなかった。落戸川(現曾我川)筋では大網村(現磯城郡田原本町)あたりまで示し、『やな

舟此所迄参候、滝五里半』とあり、保田川（現飛鳥川）筋では竹田村（同上）あたりまでを示し、これまた『やな舟此所迄参候、滝四里』とある。寺川筋では、その支流で伴堂村あたりを示し、『やな舟爰元迄参候』と記し、本流では今里村（現磯城郡田原本町）あたりを示し、『やな舟此所まで参候、滝四里半』と記載している。長谷川筋では法貴寺村付近（同上）を示し、『やな舟此所まで参候、滝五里』とし、奈良川（現佐保川）筋では、八条村付近（現大和郡山市）を示し、『やな舟此所迄参候、滝三里半余』とあり、葛下川筋については記すところがない。とすれば、曾我川・飛鳥川・寺川・長谷川・佐保川筋に就運があり、距離の上では落戸川筋が一番奥地に達していたことがわかる」と、記されている。

- 16) 剣先船で運ばれた荷物は、亀瀬でいったん陸揚げされ、大和側の魚梁・藤井の間屋場まで陸送された後、魚梁間屋からは「手船」（魚梁船）で、また藤井間屋からは「牛馬を以て」同国内の各地へ輸送されていた。
- 17) 欠年「乍恐御訴訟奉申上候」（国学院高等学校所蔵富本家旧蔵文書、安堵町教育委員会所蔵写真真版による）。
- 18) 「大和川筋剣先船出入諸事控」（天理図書館近世文書）所載。
- 19) これらの経過については、とりあえず、奥田修三「大和における国訴」（『立命館経済学』8巻4号、1959年）、片山清「住吉大社石文による地方史の発見(四)～(七)」（『すみのえ』198～201号、1990～91年）、を参照されたい。
- 20) 前掲註10)の坂本長兵衛の記録から引用。
- 21) 天保12年8月13日付の本国訴の訴状には、その場所は「河辺峠」と具体的に記されている。
- 22) 大和国の百姓たちが、大坂町奉行所によって認可されていた剣先船仲間を相手取り、同奉行所へ出訴に及ぶに際しては、大和国を支配国としていた奈良奉行所の添簡が、手続き上必要であった。
- 23) 註18)と同史料から引用。
- 24) 本国訴の訴状には、「先年御差免御座候剣先船数三百拾壹艘^(ママ)御座候処、近年舟持不引合ニ付、当時^(ママ)右之内式百四拾艘相働キ、其余休舟之由、尚又舟人共毎となく順番積取極メ、先番之船積荷揃迄後番之舟を押へ荷物不為致、肥荷物^者定舟賃故大坂表ニ而為滞置、増賃銀有之候外の荷物を心掛ケ積登り、重々身勝手之仕癖増長仕」云々と記されている。
- 25) 以下の史料引用や記述は、特に断らないかぎり、前掲註10)の坂本長兵衛の記録による。
- 26) 前掲註10)の中西小市郎の記録による。
- 27) 同上。
- 28) 前回の集会の折、津藩領の代表として出席した梅咲善八が、高取藩預所年預佐右衛門に、「柳生様・小泉様・談山社領等之人々」が会合に姿をみせないのはどうしてかと問うており、これをうけて、佐右衛門からこれらの所領へ、代表者の出席を促したのではないと思われる。
- 29) 以下の史料引用や記述は、特に断らないかぎり、前掲註10)の中西小市郎の記録による。
- 30) この点に関して、藪田氏は、「負担軽減の論理」が国訴において「直接行動でなく惣代制をとらせたのである」と指摘されている（前掲註7）書92頁）。
- 31) 桜井市池之内、梅咲直昌家文書。
- 32) 同年12月13日に、大和国惣代と魚梁・藤井間屋など大和川筋の「問屋組合中」との間で「約定書」が交され、①国訴に要した費用の半額＝「荷物掛り」分については1駄について1分5厘宛を問屋の側で徴収し、これを取りまとめて、その5分の4を、毎年7月と12月に国惣代の側へ渡す、②徴収銀の5分の1については、「前年河州松原宿并三市宿分和脇へ越荷物口銭可遣様之出入差押へ」「国難」を救ってくれたことに対する芳志として、問屋の側へ遣す、③「荷物掛り」銀の釀出を拒む荷主があれば、その名前を問屋から国惣代の側へ連絡し、国惣代からその荷主にきちっと

- 醸出するよう接衝する、などの事項を申し合せている（註18）と同史料による）。本件については、片山前掲「住吉大社石文による地方史の発見Ⅷ」66～69頁参照。
- 33) 彼等が「組合為方」を考えて行動しなければ、たとえば、天保4年に平群郡久安寺村ほか4か村が惣代庄屋半内の退役→惣代庄屋の交代を要求している（『平群村史』〈1959年〉145頁）ように、リコール運動が展開されよう状況になってきていた点にも留意しておく必要がある。
- 34) まず「国中御料私領共万石以上惣代参会」が開かれて運動方針が決定され、「万石以下」の不参の所領へは、郡単位に廻状が廻されて、方針が伝えられるとともにその意向が確認されていった（天保13年3月「百姓奉公人無数候ニ付歎訴下案」〈大和郡山市白土、喜多六宏家文書〉）。
- 35) 享和3年の時点では、同国内に所領を有する領主の数は、133にものぼっていた（同年改「大和国高附帳」〈県立奈良図書館所蔵〉による。幕領3分は3として計算した）。その後、清水領知が開設されるなど、全く変化がなかったわけではないが、その合計数は、本国訴の時点でもほとんど変わらなかったものと思われる。
- 36) 国内の旗本領と寺社領の数はともに50をこえていたが、本国訴に加談した所領の数はそれぞれ15と7に止まった。小さな所領を戦列に加えていくことの難しさが窺えるが、寺社領について言えば、その大部分は木津川水運との結びつきが想定される添上郡域に集中しており、このことも加談所領の少なさに関わっているように思われる。
- 37) 「はじめに」の部分で述べた在郷商人オルガナイザー説との関わりで補足しておく、本国訴を組織し推進していったのは、在郷商人としての肥屋らではなかった。もちろん、各所領惣代のなかには、国惣代の一人となった額田部村の嘉兵衛や常盤村作五郎の兄作治郎、曾根村嘉兵衛のように、肥屋を営んでいた人物も存在したが（天保12年8月「剣先一件肥屋其外調印帳」〈川西町吐田、新野シズ家文書〉）、彼等は他の所領惣代と同じく、村落行政組織の頂点に位置する存在（常盤村作治郎は取締役、他の2名は惣代庄屋）としての立場から対策会議に出席し、国訴を準備・推進していったのである。
- 38) 詳しくは、谷山「文化三年の大和の『国訴』について」（『ビブリア』88号、1987年）を参照されたい。国訴にカッコをつけて「国訴」と表現する意味については、同論文71～72頁に記している。
- 39) 詳しくは、谷山「大和における名目銀貸付規制運動の展開」（『地方史研究』168号、1980年）を参照されたい。
- 40) この後、幕領の惣代らは、天保13年にも文化3年と同様の形で「国訴」を展開しており、その終結後、翌14年2月に私領方にあてた廻章のなかで、「此上連も国中難洪之義も出来致候ハ、無御遠慮御料所江可被申聞候、可成丈ケハ取締仕、国中之為方ニ相成候ハ、諸入用銀杯ニ相抱候義ニ而ハ無御座候間、無御心置御談し有之度候事」と述べている（前掲註10）の中西小市郎の記録）。
- 41) 国訴の訴状や国訴への参加を呼びかけた廻状などに見い出される「国難」やその裏返しとしての「国益」概念については、拙稿「近世後期の地域社会の変容と民衆運動」（『歴史学研究』626号、1991年）で若干論じたことがあるが、あらためて詳論する予定である。
- 42) 註34）と同史料。
- 43) 詳しくは、谷山前掲註41）論文を参照されたい。
- 44) 『徳川禁令考』2924号（前集第5所収239～240頁）。
- 45) 註18）と同史料所載。
- 46) 同上。ここでは、「藤井へ着荷物は迄牛馬を以引取候分、今般私とも村々々新ニ船三十艘造立、亀瀬藤井々右三十艘之船へ積替、当国向々江積登り申度」と願い出ているが、その結末については明らかではない。

天保期国訴の組織過程（谷山）

〈付記〉 末筆ながら、史料所蔵者各位をはじめ、史料調査の際に大変お世話になった広吉寿彦・平井良朋両先生、そして研究会の場で色々と御教示をえた「明治維新期の研究」班の皆様方に、この場を借りて心よりお礼を申し上げたい。